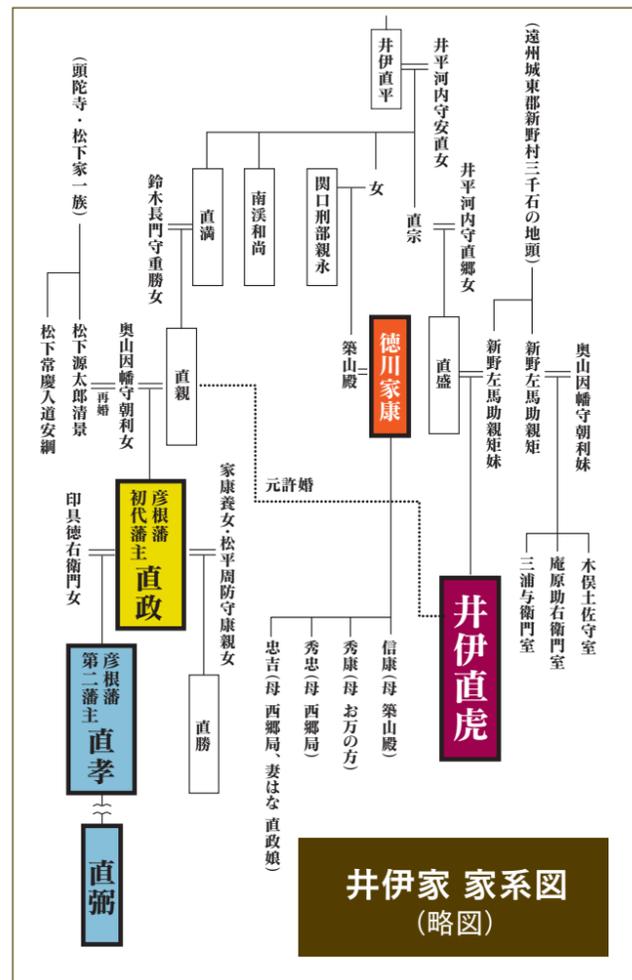




豪徳寺(井伊直弼の墓)
 東京の世田谷区にある井伊家菩提寺「豪徳寺」には、井伊家の墓があり、直弼をはじめとする江戸で亡くなった藩主や藩士、その家族の墓、総数300基余りが並ぶ。大名の筆頭格として、また徳川將軍家に仕えた井伊家を語る貴重な史料として平成20年(2008)に国史跡に指定された。



ちよこつと知識

大河ドラマ第1作目は「直弼」が主人公

1963年から放送が始まった『大河ドラマ』は「おんな城主 直虎」で56作目。1作目の舟橋聖一氏原作の「花の生涯」は井伊直弼の生涯を描いたものだ。井伊家の物語が大河ドラマで2回取り上げられたことになる。ちなみに最も多く取り上げられているのは、浜松から大出世した徳川家康公である。

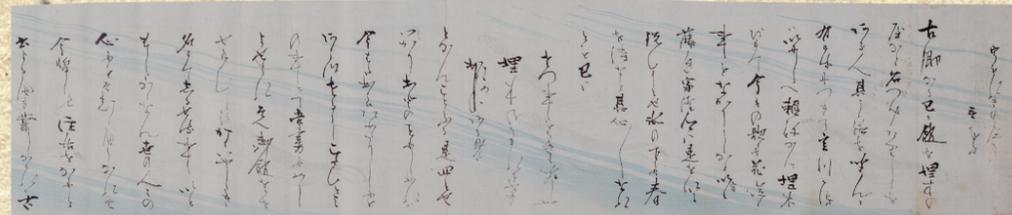
直虎も直弼も本来当主になるはずではなかった!?

戦国時代、井伊家22代当主・直盛の娘として生まれた直虎は、父の従弟である直親と婚約したが、今川に命を狙われた直親が身を隠すと、「次郎法師」として龍潭寺で出家することになる。逃亡から10年、井伊谷に戻り23代当主となった直親は、奥山氏の娘との間に待望の男子・虎松(後の井伊直政)を授かるが、今川に謀反の嫌疑をかけられ誅殺。次郎法師は井伊家の遺児・幼い虎松を守るため、龍潭寺・南溪和尚と相談し、領主となる決意を固め、「女城主・井伊直虎」が誕生することになった。一方、時は幕末。井伊直弼は彦根藩主・井伊直中の14番目の子として誕生。母親が側室だったこともあり、家督の

継承を期待できる立場ではなかったという。17歳から32歳までの16年間、自ら埋木舎と名付けた質素な屋敷で学問や武芸に明け暮れる日々を過ごしていたが、直弼の兄・直亮が家督を継ぐも後継者ができぬまま死去。さらに他の兄弟はすでに養子に出ているため、最終的に直弼が継ぐことになったと伝えられている。当主になるはずの者ではなかったものの、井伊家の魂を受け継ぎ、歴史に名を残し、しっかりと後世にバトンをつないだ2人は当主に成るべくしてなったのかもしれない。



「うもれぎのやの言葉」
 大名になれなくても自分の道をしっかり生きていこうと直弼が決意を綴ったもの
 彦根城博物館所蔵

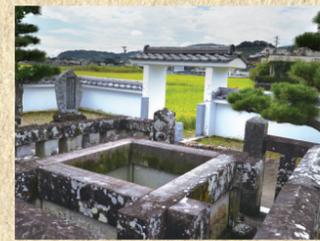


井伊直弼の活躍は直虎が井伊の当主を務めた戦国時代から約300年後の幕末期にあたる。未曾有の動乱期、幕府の実質的なトップである「大老」として外交も内政も任された井伊直弼は、藩政改革と「日米修好通商条約の締結」という功績を残した。藩政改革では、怠けている家臣には処分を下し、努力するものや才識ある人材には十分な褒美を与え、病氣や貧困に苦しむものには支援をするといった政策を行い、庶民の暮らしにしっかりと目を向けた。そのため直弼は庶民に敬愛されたと言われている。また攘夷論が高まる中、ペリー総督率いる黒船が浦賀に来航すると、直弼は「開国して国力を高めるべき」と主張。条約を拒み鎖国を続けたときの日本の実害を予測し、軍事力で劣る日本では外国と積極的に交易を進めるしか方法はないと考えたのだろう。天皇の許しを得られないまま条約の調印を行った直弼は尊王攘夷派に猛反発されたことから、吉田松陰らを弾圧した(安政の大獄)。その結果、桜田門で水戸藩、薩摩藩の脱藩浪士たちに暗殺されてしまう(桜田門外の変)。

ちよこつと知識

井伊家発祥の地・井伊谷を何度も訪れた井伊直弼

井伊家の菩提寺、龍潭寺の南、田園のかたわらにある白壁に囲まれた大きな石組みの井戸は、井伊家の初代・共保公が誕生したと言われる場所。浜名湖畔の志津城の城主、藤原共資(ともしげ)の養子に出された共保は、後に井伊谷に戻り、井伊氏を称したと言われている。井伊家の井桁の旗印と橘の家紋は、この井戸と隣に咲いていた橘の花にちなんでいるとも言われる。傍らには井伊谷に訪れた井伊直弼が寄進した石碑とその際に読んだ句碑もある。



共保公出生の井戸

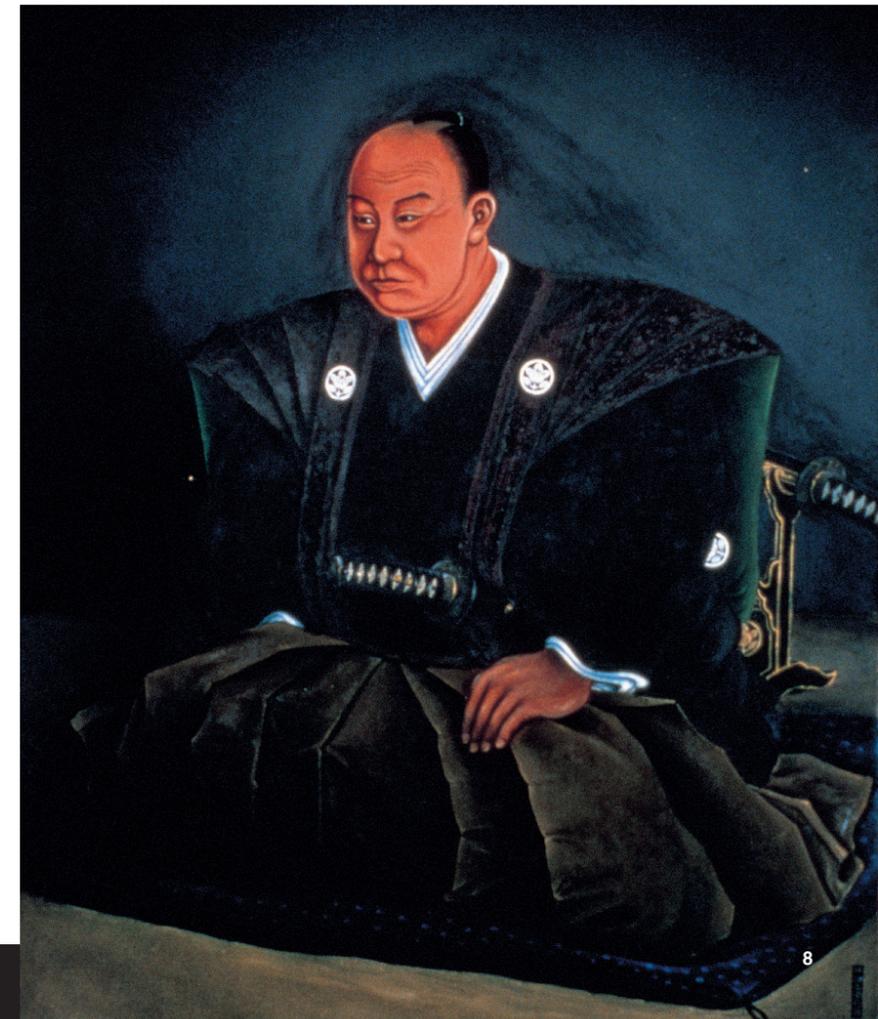
直弼が直親のお墓に灯籠を寄進

浜松市北区細江町の都田川堤防沿いに、第23代当主井伊直親の墓がある。1851年に井伊直弼が直親の墓参りに訪れたときに寄進したと伝えられる灯籠が立つ。



井伊直虎が血を流さずに領民や領地を守ろうとしたのと同じように、直弼も戦争を避けるために開国の道を選んだのかもしれないのう。

しかし、直弼の「是が非でも開国」という思い切った行動がなければ、戦争に突入し、日本は植民地化されてしまっていたかもしれない。負のレッテルを張られ、批判的な記述をされるが多かったが、彼こそ日本の近代化の礎を築いた人物であるとも言えるだろう。



Naosuke 井伊直弼
 画像提供: 豪徳寺